

初年次教育としての文章作成能力育成プログラムに関する考察

—2021年度「日本語文章作成演習」における実践をもとに—

Writing Programs as a First-Year Experience

—Reviewing the Course Management of the Writing Programs in Academic Year 2021—

畠山 理恵

HATAKEYAMA Rie

要旨

本研究は、本学国際文化学部1年次生必修科目「日本語文章作成演習」ⅠおよびⅡのより効果的な指導・運営のあり方を探ることを目的とする。これらは初年次教育に相当し、前期「Ⅰ」の単位取得者が後期「Ⅱ」に進む、グレード制科目として実施されている。入学初年度に履修する科目として、適切な内容を適切なタイミングで提示し指導できているだろうか。

そこで、科目担当者としての2021年度の実践を、(1)初年次教育の文章作成能力育成プログラムとして、運営は適切であったか、(2)前期「Ⅰ」から後期「Ⅱ」への移行は円滑であったか、を観点に点検する。併せて、(3)本学カリキュラムにおいて、2年次以降、文章作成能力育成プログラムがどう展開しているかを調査し考察する。

●キーワード：初年次教育 (first-year experience) / 文章作成能力育成 (developing writing skills) / コース運営 (course management)

I. はじめに

国際文化学部の1年次必修科目「日本語文章作成演習」は、前期で「Ⅰ」を履修し、単位が取得できれば後期「Ⅱ」に進むグレード制科目である。この科目は、初年次教育、すなわち「高等学校から大学への円滑な進行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功するべく、主として大学新生を対象に作られた総合的教育プログラム。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新生に最初に提供されることが強く意識されたもの。」(文部科学省 2022)の一環と捉えることができる。

大学初年次生の立場から言い換えてみると、高校から大学へと学びの質や学び方が変化することを知り適応するための科目、高校から大学への橋渡しとなる科目、大学での学びが主体的・探索的であることを知る・体験する・今後学習や研究を進めていく際の土台を築くことを目的とする科目、などとなるだろう。

では、大学初年次生のための科目として、「日本語文章作成演習Ⅰ」「同Ⅱ」においては、それぞれに、また統合的に、適切な指導・運営ができていだろうか。

そこで本稿では、科目担当者として、過年度の実践を振り返り検討する。目的は、当該科目における、より効果的な指導・運営を探ることである。

II. 先行研究

日本の大学における初年次教育の実施状況、文章作成能力育成に関するプログラムの実施状況、同プログラムにおいて取り上げるべき内容の順に、先行研究を見ていく。

1. 日本の大学における初年次教育の実施状況

文部科学省は、全国の大学を対象とする定期的な調査に初年次教育に関する項目を含めている¹⁾。具体的には、初年次教育を実施しているか、実施している場合、内容にもとづく11分類(11プログラム)のいずれであるかを問うている。令和2年度の調査結果によれば、96.8%が初年次教育を実施している。その内容を11プログラムのランキング上位で見ると、第1位「レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるためのプログラム」91.9%、第2位「プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身に付けるためのプログラム」85.1%、第3位「大学内の教育資源(図書館を含む)

の活用方法を身に付けるためのプログラム」83.0%というようである。(文部科学省 2022)

本学ではどうだろうか。『履修要項 2023』を見ると、科目種別や名称は異なるものの、「スタディスキルズ」「キャリアデザイン(導入編)」「基礎演習」「日本語文章作成演習」といった1年次生必修科目が、どの学部学科においても設置されており、初年次教育の実施が確認できる(文化学園大学 2023)。

筆者が大学生だった1980年代、新入生向けに大学での学びとは何か、どう適応すればよいか等の手ほどきをする科目はなかった。そのような知識やスキルは、カリキュラム外で学生個々人が自主的に身に付けるべきもので、大学が授業として習得の機会を設けるまでもないという認識が一般的であった。その後、上述した2023年現在の状況に至る背景には、大学進学一般化ならびに大学入学者の多様化、一斉学力試験による入学者選抜では対応しきれなくなったことがある。(吉岡 2013)

2. 日本の大学における初年次教育としての文章作成能力育成指導の状況

文部科学省(2022)の調査結果からは、初年次教育全般の状況、文章作成に関するプログラムを実施している大学が多数あることが理解できた。

時任他(2022)は、アカデミックライティング教育に絞って実践状況を明らかにするべく、日本全国の4年制大学を対象に質問紙調査を実施している。2019年度につき、初年次教育ライティング科目担当者に回答を求めた。回収率は約25%とさほど高くないものの²⁾、文章作成能力育成の取り組みが具体的にうかがえ、興味深い。

まず、科目の位置づけやクラスサイズなど、設定や方法論に関する結果を見る。初年次生向けに単独または科目の一部としてライティング指導を実施している大学は75.8%で、その91.3%が対面による指導を行っている。履修区分では必修64.4%、選択必修が12.5%である。1クラスあたりの受講者数に制限を設けている大学が約6割、設けていない大学は4割強であり、前者では21-40人の範囲が最も多く、32.6%となった。

文章作成の指導を行っている割合の高さは、大学が学習・研究成果の記録と公表を常に求められることの表れであろう。また、対面指導が圧倒的多数であるのは、新型コロナウイルス感染症拡大以前の年度だったためと推測できる。そして、科目の性質上、教員には成果物を読む・添削する・説明を加える等、受講者ひとりひとりへの対応が求められるため、人数制限を設けている大学が

過半数となっているのであろう。

次に、指導内容に関する結果を見ていく。同調査では、ライティング能力を構成する要素として12項目を設定し³⁾、各項目がどの程度指導できているか、5段階による自己評価を求めた⁴⁾。「十分に指導できている」「指導できている」と自己評価が高い上位3項目は、構成、文法・文体、根拠であった。反対に、「あまり指導できていない」「まったく指導できていない」と自己評価が低い下位3項目は、論文・書籍等の資料の活用、ネット記事・新聞などの資料の活用、引用となった。

上位の項目、構成、文法・文体、根拠は、学術的な文章の特徴であり、教員が比較的説明しやすく、学生にも理解されやすい項目であると考えられる。すなわち、章立てや展開、ふさわしい文体、文作成時の規則、客観的な証拠による主張の裏付けである。一方、下位の項目は、主張を支持し読者を説得するに足る根拠を探し出し、取捨選択した上で、学術的文章の作法にしたがって自らの文章に取り入れ正しく示すことに関連している。これらは、学生にとって理解はできても実際の運用が難しいと推測できる。筆者自身、日々の授業で少なからぬ学生が悩む場面にしばしば遭遇する。たとえば、資料の探し方はわかるが、探し当てたものをどう読み込み活用していくかがわからない。自らの主張と資料から取り入れたことを区別する必要性はわかるが、どう書けばよいかかわからない。自分の言葉、資料から取り入れた他者の言葉を統合し文章を作成するのが難しい、というようである。

3. 初年次教育としての文章作成能力育成プログラムで何を内容とするか

では、文章作成能力を高めるための科目において、初年次生にどのような内容を提供すればよいのだろうか。ここでは、科目担当者による研究を2点検討する。

畠山(2022)は、安藤(2018)の「大学で求められる『書く力』とは、『客観的な文章を書ける力』ではなく、『書く目的や、文章を読む相手によって、構成と論拠を選択できる力』であり、高校までの『国語』で効果的とされてきた『主観的な根拠に加え、客観的なものも書ける力』」を具体的な指導内容に落とし込むべく解釈した。そして、大学において書いて伝える力がなぜ求められるかの理解(動機づけ)、文章の体系・分類の理解、文章の種類によって内容や言葉遣いが変わることの理解および体験(可能な限り多くの実例を読み体験的に理解すること)、単語・文・文章レベルでの書き練習、書く以前の場面把握・構想構築の練習などであるとした。

申田(2020)は、まず、大学入学以前の中等教育(中学、高校)「国語」での指導内容と、大学入学後に個々の教員からレポートに対して求められる構成・内容とを比較対照し、両者のギャップを明らかにした。それを踏まえて、特に重要な指導項目を、(1) 情報を取捨選択する技術、(2) 1つの視点で論点を絞る技術、(3) 引用の技術、(4) 論理的に段落を構成する技術「パラグラフ・ライティング」であるとしている。

畠山(2022)の対象科目は、本学2021年度前期「日本語文章作成演習 I AB①」である。学問の世界に足を踏み入れたばかりの新生が初めての学期に履修する科目であることが、先述の項目に反映されている。一方、申田(2020)の対象科目は、1年次後期のレポート作成技術の習得に特化した科目である。重要項目に挙げている4点は、作成過程で学生が困難に感じると予想され、特に丁寧に指導するべきものとも言える。受講者は、1年次前期に、大学での学び全般に関する知識や複数のスキルを概観し練習する科目を履修した上で、同科目に進んできている。

以上の先行研究を踏まえて、初年次1年間の指導内容を考えてみると、基本的には

- ・文章および書き言葉の体系理解
- ・読み書きするテキストの、文章の体系における位置づけ*
- ・書く状況の適切な理解、理解にもとづく構想構築*
- ・状況理解にもとづく適切な言葉の選択、適切な展開の考案*
- ・文章作成*
- ・文章作成上のルールを理解、運用*

に集約されると考える。

1つめの項目は、プログラム序盤で、その後も必要に応じて、文章や書き言葉の全体像を確認し理解する段階を示す。その後、文や文章を作成する段階に入ったら、ジャンルに応じて、2つめ以降*を付した項目をより具体化したり下位項目を設けて細分化したりして提示し、説明や練習を行う。たとえば、論証型レポート作成を課した場合の「書く状況の適切な理解、理解にもとづく構想構築」では、指示(作成条件)を確認して、何を目的に・だれを読み手に想定し・どのようなことを内容に・どのような体裁で・どの程度のボリュームで書き進めればよいかを正しく理解する。そして、何をテーマとするか・何を問いとするか・何を主張するか・その根拠は何か、など核となる構想を立て、矛盾がないかを点検する、

というようなことが授業内容となるだろう。同じく「文章作成上のルールの理解、運用」では、伝えたいことを裏付けるために他者の発言・研究結果などを取り入れるには、自らの言葉と他者の言葉を区別して書くことが研究倫理上必須であることを理解し、どう記述すればよいかを知って練習した上で、それぞれのレポートの文章作成に生かす、といった展開になるだろう。

また、指導内容設定にあたっては、履修のタイミングを考慮することも重要である。申田(2020)は、対象科目を、大学入学以前の中等教育「国語」での学習→1年次前期「実践入門セミナー」(大学における学び入門)→1年次後期「入門演習」(レポート作成技術習得)→2年次「基礎演習」(専門研究準備)、の流れの中に位置づけて論じている。何をどの程度学習して入ってきているか、当科目修了後に学習の機会があるかといった、前後する科目間のつながりは、内容設定に大きな意味を持つ。たとえば、2年次以降書いて伝える力の育成を内容とする科目がなければ、「基礎の基礎」を厳選し指導していく判断が求められるだろう。すなわち、2年次以降履修した科目でレポートや論文作成が課された際、いつでも立ち返って参照でき、課題の条件その他、その時々状況に合わせて応用が利く内容とする必要がある。

III. 研究課題

本研究では、2021年度国際文化学部国際ファッション1年次生前期必修科目「日本語文章作成演習 I AB①」、後期「同II AB①」における実践、ならびに、関連の文献を分析・考察の対象とする。

研究課題を以下のように設定する。

- 課題1 初年次生向け文章作成能力育成プログラムとして、対象科目においては、適切な目標設定のもとに、適切な内容が提供され指導が行われていたか。
- 課題2 前期から後期への移行は円滑であったか。
- 課題3 対象科目履修後の2年次生以降、文章作成能力はどのように育成されるか。

IV. 実践報告

1. 対象科目

対象科目はすでに前章で述べた。2021年度のこれら2科目を選定した理由は、畠山(2022)において「日本語文章作成演習 I AB①」を対象とし、同年度前期の状況を把握していること、続く同年度後期「同II AB①」を併せて見ていくことにより、本学における初年次教育と

しての文章作成能力育成プログラムの状況をより明らかにできると考えたためである。

2. 複数クラスによる運営体制

(1) クラス編成

対象科目名の「AB①」とは、国際ファッション文化学科1年次生Aクラスの1/3、Bクラスの1/3を合わせて編成した、AB①②③クラスのうちひとつであることを示す⁵⁾。1クラスあたりの受講者数が20数名になるように調整され、教員3名で受け持ちを分担した。前期「I」の受講生・担当教員の編成は後期「II」に引き継がれ、1年を通じてほぼ同じ顔ぶれとなる⁶⁾。

(2) クラス間の申し合わせ

同一科目を複数クラスで展開するため、担当教員間で申し合わせ、大枠を共有した。また、それ以外はクラス担当教員の裁量で進めてよいことも確認した。

大枠とは、目的、共通の課題、評価基準、評価方法である。

(3) 前期「I」の大枠

目的は、自分の考えを整理し文章によってわかりやすく伝えられるようになることである。

どのクラスにおいても作文が4篇課される。話題は、自分自身に関することである。

評価は、授業期間中のパフォーマンスをすべて数値化し、提出物など70%、授業態度30%の割合で換算し、総合得点を算出することによって行う。

上記評価基準から算出された総合得点をもとに、A、B、C、Eの4段階で判定する⁷⁾。A、B、Cであれば合格、Eは不合格となる。

(4) 後期「II」の大枠

目的は、ある課題について適切なレポートが書けるようになることである。

どのクラスにおいてもレポート2本の執筆が課される。

評価基準、評価方法は、前期「I」と同様である。

(5) 大枠以外の各クラス担当教員による判断、運営

上記大枠以外は、担当教員の裁量に任されていた。具体的には、教材、練習内容、練習のし方、進度、時間配分などである。加えて、後期「II」では、共通の課題であるレポート2本の内容、作成条件も自由裁量となっていた。

3. 前期「日本語文章作成演習 I AB①」

担当したAB①クラスにおける実践を述べる。なお、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、全面的にオンラインによる遠隔授業として行われた。

(1) 受講生

全21名であった。初回アンケートで日ごろどのようなものを書いているか尋ねたところ、日記・メモ・手紙・授業ノートなど私的な文章に相当するものが全体の44%と最も高く、学術的なものはそれほど高くなかった。

(2) コースデザイン (科目の概要)

目的「自分の考えを整理し文章によってわかりやすく伝えられるようになる」をより具体化・細分化して示せるように、到達目標を設定した。

1. 書く以前に、何のために・だれに向けて・何を伝えるかを明確に設定できる。
2. 書く場面にふさわしい言葉が選択・判断できる。
3. 書く場面にふさわしい展開(流れ)が考えられる。
4. 選んだ言葉を正確に使い、思い描いた展開に沿って、まとまった文章が作れる。
5. 読み手がだれであっても同じように理解される、言いたいことが伝わる文章が書ける。
6. 文章を読み、筆者の意図が正確につかめる。
7. 文章を読んで理解できたことを自分自身の言葉でまとめなおし、ポイントを外すことなく表現し、他者に伝えることができる。
8. 文章や口頭で他者と対話・交流し、アイデア交換、意見交換などができる。それをヒントに文章作成や書いたものの検討ができる。

その上で、全14回の授業を以下4つのブロックに分け、上記の目標に沿って、書き言葉の体系理解→今後頻繁に読み書きが求められるジャンルへの注目と観察→文章の構造理解と要点把握、要約文作成→論理的な意見文作成という順に練習が進められるようにした。

第1～3回 書き言葉の体系・文章のジャンルを知る。

第4～8回 説明文・意見文に注目する。

第9～11回 要約する。

第12～14回 意見文作成に挑戦する。

(3) 指導の状況、意図

授業では、日ごろさほど気に留めずに読んだり書いたりしている語・文・文章に意識を向けること、可能な限り多くの例に接して具体的・体験的に理解すること、漫然とではなく意図をもって文や文章を作成することができるように、説明のし方を工夫したり、練習課題を作成したりした。

また、オンライン授業ではあったが、到達目標8を少しでも実現するべく、頻繁に、ブレイクアウトルームを活用して小グループで意見交換する時間を設けたり、ク

ラス全員の作品を文集にまとめたり、全体説明の時間に学生による秀逸な文・文章を紹介したりした。

(4) 文章作成課題

授業では、さまざまな種類の文、文章作成を多数求めたが、その中からまとまった文章に相当するものを抜き出すと、このようである。*は、どのクラスでも課すことになっている共通の作文以外の課題であることを示す。

出題にあたっては、書く目的・想定される読み手・内容として入れるべき要素などを明示し、書く以前にメモを作成して考えを整理する手順を取り入れた。

共通課題1 自己紹介 (仕事の応募書類として志望先に提出する説明文、300字程度)

共通課題2 春休みから入学後1か月現在までのできごと (説明文、500字程度)

共通課題3 出身地の紹介 (テレビ番組出演者として話すための原稿、約3分で話せる程度の分量。字数指定なし)

共通課題4 これまでとこれからの自分について述べる。(説明文、600-800字程度)

*小論文 2つの相反する立場を持つ論題を設定し、両方を検討した上で、いずれを支持するかを明確に論理的に述べる。(論説文、600-800字程度)

(5) 終了時の達成状況

成績の概況、到達目標の自己評価を述べる。

受講者21名全員が及第し、その半数以上がA判定であった。最終回アンケートで到達目標1~8がどのぐらい達成できていると思うかを5段階で評価してもらい⁸⁾、最も高い評価を5~最も低い評価を1に換算し、クラス平均を出して高い順に並べたところ、このようになった。()内に平均値を示す。

1 書く以前に、何のために・だれに向けて・何を伝えるかを明確に設定できる。(4.3)

8 文章や口頭で他者と対話・交流し、アイデア交換、意見交換などができる。それをヒントに文章作成や書いたものの検討ができる。(4.3)

3 書く場面にふさわしい展開(流れ)が考えられる。(4.2)

6 文章を読み、筆者の意図が正確につかめる。(4.1)

7 文章を読んで理解できたことを自分自身の言葉でまとめなおし、ポイントを外すことなく表現し、他者に伝えることができる。(4.1)

2 書く場面にふさわしい言葉が選択・判断できる。

(4.0)

5 読み手がだれであっても同じように理解される、言いたいことが伝わる文章が書ける。(3.9)

4 選んだ言葉を正確に使い、思い描いた展開に沿って、まとまった文章が作れる。(3.9)

(6) 学生たちの声

終了後、前節で挙げたものとは別に個人別アンケートも行った。到達目標1~8の自己評価が初回・最終回でどうだったか一覧表にして変化がわかるように整え、ひとりひとりに配布し、任意の目標をいくつか選んでコメントしてもらった。目標別に主だったものを抜き出すと以下のようである。

表1 前期「I」目標別コメント

1 書く以前に、何のために・だれに向けて・何を伝えるかを明確に設定できる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ どういう状況でどのような言葉を使えばいいかをきちんと理解してから書けるようになった。 ・ 以前は意識せずに読み書きしていたが意識するようになった。 ・ どういう状況を想像して書くようになった。
2 書く場面にふさわしい言葉が選択・判断できる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話し言葉と書き言葉の区別を意識して使えるようになった。 ・ 以前は相手をあまり意識せずに書いていたが、相手によって文章の硬さなどを意識するようになった。
3 書く場面にふさわしい展開(流れ)が考えられる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 漠然と読んだり書いたりしていたが、気を付けるようになった。文章をどう構成すればよいか少しずつわかってきた。 ・ 書く以前に構成を考え内容を整理しておくことを学び、場面に合った流れで文章が作れるようになった。
4 選んだ言葉を正確に使い、思い描いた展開に沿って、まとまった文章が作れる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 練習を重ねて、どんな場面でどのような言葉を使えばいいか判断できるようになった。 ・ 考えることはできても、書くことに苦手意識があつて不安。
5 読み手がだれであっても同じように理解される、言いたいことが伝わる文章が書ける。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文章でも会話でもわかりやすく伝えられるようになった。 ・ 何が言いたいのか、相手に伝わっているかを意識するようになった。 ・ 以前書いていたものは理解されづらかったが、だれにでも理解されるものが作れるようになった。
6 文章を読み、筆者の意図が正確につかめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 段落ごとに要点を押さえていくやり方を知り理解できるようになった。 ・ 以前は苦手だったが、練習を重ねて筆者が言いたいことが見つけられるようになり自信がついた。

7 文章を読んで理解できたことを自分自身の言葉でまとめなおし、ポイントを外すことなく表現し、他者に伝えることができる。
<ul style="list-style-type: none"> ・以前は自分の言葉でまとめるのが難しかったが、今では展開を考え、まとめることができる。 ・講座序盤の易しめのものを伝えることは問題なかったが、徐々に対象の文章が長く・難しくなってくると、何が大切で何を伝えなくてはならないかがわからなくなっていった。 ・読んで理解はできるが表現するのはまだ苦手だ。時折紹介されるよい例に接すると、自分はまだまだだと感じる。
8 文章や口頭で他者と対話・交流し、アイデア交換、意見交換などができる。それをヒントに文章作成や書いたものの検討ができる。
<ul style="list-style-type: none"> ・対面だとあまり発言できず消極的になってしまうのだが、オンラインだからか思ったよりも積極的に発言できた。 ・話し合いで自分とは異なる意見に接して考えが変わる体験をした。他人の意見を取り入れるようになった。

4. 後期「日本語文章作成演習ⅡAB①」

後期「Ⅱ」における実践を述べる。前期「Ⅰ」に続き、オンラインによる遠隔授業として行った。

(1) 受講生

2021年度前期「Ⅰ」受講生21名+再履修生2名で構成される全23名となった。初回のアンケートで①レポート作成に関する学習経験の有無、②この前期に履修した科目でレポート課題が出題されたか・書いたかを尋ねた。①では「学習経験あり」が全体の59%、②では「出題され書いた」が77%であった。

(2) コースデザイン (科目の概要)

目的「ある課題について適切なレポートが書けるようになること」をより具体化・細分化して示せるように、到達目標を設定した。

- 1 論説の文章を読み、内容ならびに土台となっている論理が正確に理解できる。
- 2 あるトピックについての見解を、論理的・客観的に組み立てることができる。
- 3 組み立てた論理を文章によって表現し、他者に伝えることができる。
- 4 言いたい・主張したいことの根拠となる、客観的な事実を探しだすことができる。
- 5 探しだした客観的な事実で証明しながら、言うことが正当であると読み手に印象づける、説得力ある文・文章が書ける。

当科目の大枠で述べたように、展開する全3クラスでレポート2本の執筆が課されている。これを区切りに、

第1～2回 レポートを書く体制を整える。

第3～6回 レポートⅠを作成する。

第7～14回 レポートⅡを作成する。

というように全14回を3つのブロックに分けて進めた。第1～2回はレポートに使われる表現の確認と練習、資料の種別や大学図書館の活用法などを内容とした。続く2つのブロックでは、それぞれのレポートの例を観察しつつ、構想の立て方、素材の集め方、集めた素材の文章への生かし方、研究倫理としての引用の理解と練習、段階的な文章の作成を行った。

(3) 指導の状況、意図

レポートは文章の集合体であり、前期「Ⅰ」で求めた単体での各種文章作成とは取り組み方が異なる。当然、難易度も上がる。

指導にあたっては、学生が、よりどころにできる例があり常に参照できる、その例をじっくり観察しながらレポート作成に必要な思考法・記述のし方を含めた文章作成法などが学べる、どのような工程を経て完成に至るか・現在そのどこに位置しているかが常にわかる、採点基準が予め公開・共有され何に留意してレポート作成を進めればよいかが明確に理解できるようにするべく、授業を展開した。

なお、後期「Ⅱ」でも、ブレイクアウトルームを活用して意見交換したり、練習問題の答え合わせをしたりする時間を設けた。少しでも他者と接し、それによって考えを整理したり、理解を深めたり、他者の様子と自分の立ち位置がわかるようにしたいと考えたためである。

(4) レポート課題

レポート2本の出題は当科目3クラス共通であるが、設定は担当教員に任されていた。筆者の担当クラスにおいては、以下のものであった。今後の大学生活で引き続き読み書きすることが多いと予測される、異なるタイプのレポート作成が体験できるようにすること、易しいものから難しいものへ移行していくことが狙いであった。
レポートⅠ 報告型レポート (書評)

ある文献を読み正確・簡潔に内容を報告する⁹⁾。同時にその文献を批判的・建設的に検討した結果 (論評) を述べる。

レポートⅡ 論証型レポート

社会的な話題を1つ選び、それについて「問い」を立て、論考した結果どのような「答え」に至ったかを客観的な証拠で裏付けつつ述べる。

字数の目安は設けず、量以上に内容・構成を重視する

と繰り返し強調した。ただし、それぞれの例から「作成条件に沿って書いていくと、この程度の文字数になる。」という認識は共有していた。例の文字数は、レポートⅠが1217字、レポートⅡが4269字であった。

各レポートの採点基準は、資料1、資料2を参照されたい。

(5) 終了時の達成状況

成績の概況、到達目標の自己評価を述べる。

受講者23名中21名が及第し、その半数以上がA判定であった。最終回アンケートで到達目標1～5がどのぐらい達成できていると思うかを5段階で評価してもらい、最も高い評価を5～最も低い評価を1に換算し、クラス平均を出して高い順に並べたところ、このようになった。()内に平均値を示す。

- 1 論説の文章を読み、内容ならびに土台となっている論理が正確に理解できる。(3.8)
- 2 あるトピックについての見解を、論理的・客観的に組み立てることができる。(3.8)
- 4 言いたい・主張したいことの根拠となる、客観的な事実を探し出すことができる。(3.8)
- 3 組み立てた論理を文章によって表現し、他者に伝えることができる。(3.7)
- 5 探しだした客観的な事実で証明しながら、言っていることが正当であると読み手に印象づける、説得力ある文・文章が書ける。(3.5)

(6) 学生たちの声

後期「Ⅱ」では、前期のような手続き、すなわち、到達目標の自己評価が初回・最終回でどうであったか個人別一覧表にして本人に見せ、任意のものにコメントをもらう、は取らなかった。そこで、毎回課していた授業後アンケートから各到達目標に関する主な言及を抜き出し、以下表2に示す。

表2 後期「Ⅱ」目標別コメント

1 論説の文章を読み、内容ならびに土台となっている論理が正確に理解できる。
<ul style="list-style-type: none"> ・長文だったので読み取るのが難しかった。 ・課題図書から要点を抜き取ってメモを作るのが難しかった。 ・論証の要素である問い、答え、理由を考えることで、文章の要点が理解できた。
2 あるトピックについての見解を、論理的・客観的に組み立てることができる。
<ul style="list-style-type: none"> ・(論証の枠組みを考える練習で) 答え、理由、根拠を考えるのが楽しかった。

<ul style="list-style-type: none"> ・(Ⅱ)主観を入れずに誰もが納得できるように作るのが難しい。 ・(Ⅱ)1つのトピックから複数の問いを作ることは難しかったが、さまざまな視点から考えることができてよかった。
3 組み立てた論理を文章によって表現し、他者に伝えることができる。
<ul style="list-style-type: none"> ・書評には短いながらもさまざまな要素が入る。読む人に伝えるように書くのが大変だと感じた。 ・(レポートの例から)その節や章が全体の中で何を示しているかがわかり、自分のレポートの構成を考える参考になった。 ・頭の中では書くことが大体わかっている、話の順序を決め、全部がつながるように書くのが難しい。
4 言いたい・主張したいことの根拠となる、客観的な事実を探し出すことができる。
<ul style="list-style-type: none"> ・(論証の枠組みを考える練習で)根拠を探し出すのが難しいと思った。 ・引用も含めてレポートの構成を考えていくことがわかった。 ・どの文章、どの情報を引用すべきか見極めるべき力をさらに身に付けたい。
5 探しだした客観的な事実で証明しながら、言っていることが正当であると読み手に印象づける、説得力ある文・文章が書ける。
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えだけではなく、しっかりしたデータとともに信頼できるものを作らなくてはならないと思った。 ・理由、根拠が明らかにされていないと、伝えたい意見が正確に伝わらないことがわかった。 ・高校でたくさんレポートを書いていたが、自分の意見・考察結果と、調査結果とを区別して書くのが苦手だ。 ・引用元の文献の種類によって(参考文献での)書き方が違うことを初めて知った。 ・直接引用と間接引用の区別が難しかった。 ・引用文の組み立て方が理解できた。

V. 2年次以降の文章作成能力育成の状況

前章・実践報告で対象とした科目の受講生・1年次生が2年次に進級して以降、書いて伝える力がどのように育成されていくかを、文献から探ることにする。

1. 対象文献

『履修要項2021』国際文化学科国際ファッション文化学科(文化学園大学2021:93-104)、ならびに、文化学園大学CamusPlan Web Service シラバス検索によって検索・閲覧した科目のシラバスを対象とする。

2. 調査方法

まず、『履修要項2021』より国際ファッション文化学科のカリキュラム全容を押さえる。次に、2年次～4年次の専門教育科目のうち必修となっている科目を把握する。その上で、それら専門教育科目・必修科目の2022年度2年次生、2023年度3年次生向けシラバスにあたり、

書いて伝える力の育成状況を探る。

上記の年度・年次に定めてシラバスを検索するのは、2021年度1年次生の、その後の進級状況に合わせて、本稿を執筆している2023年10月現在までに履修した・履修している科目の状況を把握するためである。

3. 調査結果

(1) 国際ファッション文化学科のカリキュラム概要

「第1学年（2021年度入学生）国際ファッション文化学科 カリキュラム体系図」（文化学園大学2021:93-96）からは、1年次 基礎→2年次 基礎・応用→3年次 応用→4年次 発展と学年に沿ってステージが上がること、3年次より3コース、スタイリスト・コーディネートコース、プロデューサー・ジャーナリストコース、映画・舞台衣装デザイナーコースに分かれることが理解できる。

3コースのディプロマポリシー（到達目標）に目を向けると、書いて伝える力に言及しているのはプロデューサー・ジャーナリストコースで、「自分の考えや発想を文章・映像・画像で提案できる表現力と技術を有し、計画的に企画・実行できる。」となっている。

(2) プロデューサー・ジャーナリストコースの専門教育科目における書いて伝える力

プロデューサー・ジャーナリストコースの「カリキュラム体系図」上で先述の到達目標「自分の考えや発想を文章……計画的に企画・実行できる。」につながる、2年次3年次の専門教育科目・必修科目をたどったところ全12科目となった。

上記12科目を、シラバスの記述をもとに、①授業内容に書く作業が記載され、かつ、レポートが評価対象に含まれる科目、②授業内容に記載はないが評価対象にレポートが含まれる科目、③授業内容、評価対象のいずれにも記載がない科目に分類した。科目数は、12科目中①2、②4、③6となった。

①の2科目とは、3年次通年「ジャーナリスト演習」、3年次後期「イベントプランニング演習」である。「ジャーナリスト演習」の授業内容を見ると、第3～4回「正しく言葉を使う」、第20～22回「ニュース記事を書く」、第23～25回「インタビュー記事を書く」、第26～28回「ファッション特集の企画」で書いて伝える力が求められていることが理解できる。また、評価に占めるレポートの割合は50%となっている。もう1つの科目「イベントプランニング演習」では、第3回「企画構成」で企画を考案し、第5～6回「ファッションエンターテイメントの企画立案」で企画書の作成と検証を行うとある。評価では提出

物が30%を占めており、この中に企画書が含まれると察せられる。

VI. 考察

Ⅲ章で述べた研究課題に沿って考察する。

1. 対象科目において、適切な目標設定のもとに、適切な内容が提供され指導が行われていたか

(1) 前期「日本語文章作成演習ⅠAB①」

大学新生が初めて迎える学期の科目として、目標設定と授業運営はおおむね適切だったと考える。

科目担当者として、「文章」「書き言葉」と一口に言っても多様であること、それらは状況に応じて変化すること、変化にはある一定の基準があることを学生たちに理解させることができた。そして、その理解の上に、ふさわしい言葉を選び、展開を考えて文章作成に取り組ませることができた。学生が作成した各種の文、文章は、合格水準に達していた。

学生は、全体として、いずれの到達目標も「できる」圏内に達したと認識していることが自己評価から明らかとなった。スコアが高い順に並べてみると、書く以前のアイデア立案>読解>要約文作成>適切な言葉の選択>伝わる文章作成、となっており、考える・理解することと実際に書いて表現することには差があることが明らかである。

(2) 後期「日本語文章作成演習ⅡAB①」

異なる2本のレポート作成に取り組み完成することをゴールに進めた。授業で提供した内容・運営はおおむね適切だったと思われるが、到達目標に不備がある。

到達目標1～5を見てみると、これらは、レポートⅡ・論証型レポートの作成過程に沿い、段階を追って達成すべきことのリストになっている。しかし、レポートⅠ・報告型レポート（書評）の作成過程、すなわち、文献の下読み→精読→要点メモ作成→注目点を拾い出し、それに対する見解を書き加える→メモを素材にしてあらすじを作る→執筆する、は反映されていない。練習を重ねていくと何ができるようになるかを明示するのが到達目標の役割であるが、現状ではレポートⅠ取り組み期間中の練習がどこへ向かい何が達成されるかが不明であり、修正が必要である。

レポートⅠ、レポートⅡの採点結果をパーセンテージに換算し、クラス平均を算出すると、71、67となった。レポートⅠは単体の文章として対象の文献について報告し、内容のうちある点について独自の見解を述べるもの

である。それに対して、レポートⅡは、役割の異なる4つの章を作成した上で組み合わせる複合体である。かつ、論理的に矛盾のない基本構想を立て、証明しながら主張に迫るといった、より複雑で高度な文章作成が求められる。平均値の違いは、難易度の違いと理解できる。

学生の自己評価では、全体的に、いずれの到達目標も「できる」圏内に達している。表2のコメントからは、申田(2020)が指摘した(1)情報を取捨選択する技術、(2)1つの視点で論点を絞る技術、(3)引用の技術で苦勞したことが読み取れる。これらの項目にはより注意して指導にあたる必要がある。

2. 前期から後期への移行は円滑であったか

対象科目は、クラスの顔ぶれがほぼ同一で、前期「Ⅰ」が修了すると後期「Ⅱ」に進む、同一年次の連続した科目である。ここでは、主たる文章作成課題を手がかりに、移行がスムーズであったかを検討する。

前期「Ⅰ」後期「Ⅱ」における主な課題は表3のようである。

表3 主な文章作成課題

	課題	ジャンル	文字数の目安	論理的思考
前期Ⅰ	共通課題1 自己紹介	説明文	300字	—
	共通課題2 春休みから 現在までの できごと	説明文	500字	—
	共通課題3 出身地紹介	説明文	—	—
	共通課題4 これまでと これからの 自分	説明文	600- 800字	—
	小論文 相反する立 場を持つ論 題の検討	論説文	600- 800字	要
後期Ⅱ	レポートⅠ 書評	報告型 レポート	— (1000 ~1500 字)	要
	レポートⅡ 社会問題に 関する論考	論証型 レポート	— (4000 字前 後)	要

まず内容面では、自分自身に関することを題材とし、事実を説明する具象的な文章から、小論文以降社会的な話題を扱うものへと変わり、同時に、論理的思考が求められるようになっていっている。次に文字数では、レポートⅠまでは徐々に増加していくが、その後レポートⅡで飛躍的に上がる。また、表3に記載はないが、小論文までは他者の言説にあたるものの出所を明記せずともよく、事実で裏付けながら書くことも特に求められない。一方、レポート作成においては、当然作成上必須の手続きとなる。このように、後期「Ⅱ」に入って難易度が上がること、2本のレポート間にも差があることが明確である。

実践を振り返ると、前期「Ⅰ」から後期「Ⅱ」への移行は円滑だったとは言えない。上述したように、難易度の上昇はなだらかではない。表2には、学生たちが後期の文章作成に取り組む中で困難に感じたことがさまざまに挙げられている。無理のない、スムーズなレベルアップのために、どのような手立てを取り入れて改善すればよいだろうか。

より論理的なものへと移る小論文以降の指導・運営に2点修正案を述べる。それは、論理的思考のトレーニングを取り入れること、前期「Ⅰ」の学習を後期「Ⅱ」でリソースとすることである。

論理的思考のトレーニングとは、問い・答え・理由・根拠からなる論証の枠組みが矛盾なく構築できるようになるための各種の練習である。あるトピックに関する枠組みの空欄を埋めたり、論説文を読んでもとになっている枠組みを推測して書き出したり、1つのトピックについて様々な視点から複数の問いを立てたり、といった練習ができるだろう。そして、それら練習の延長線上にあるものとして、小論文やレポートの構想構築を行えば、文章作成に生かすことができる。

前期「Ⅰ」で学んだことを後期「Ⅱ」のリソースにするとは、「Ⅱ」で取り組むレポートは「Ⅰ」の応用編であり、全くのゼロから新しいことを始めるわけではないと気づかせることである。レポートⅠ・書評には、前期「Ⅰ」の要約練習と意見文作成が生かせる。すなわち、文献の内容を正確に読み取り、理解できたことを簡潔・端的に表現し、かつ、独自の見解を述べることを単一の文章内で完結させればよい。レポートⅡ・論証型レポートには、前期「Ⅰ」の小論文を書く前に行った、素材探し、アイデア出し、それらを吟味した情報の取捨選択、論証の枠組みの点検、構想の組み立てなどが生かせるで

あろう。クラスの顔ぶれがそのまま引き継がれることは、前期にしたことを再度共有して想起させる際などに、有効だと考えられる。

3. 2年次生以降文章作成能力はどのように育成されるか

本研究で対象とした学生のその後を、カリキュラム、シラバスから調査した結果、文章作成を前面に出した科目は設定されていないことがわかった。授業内容のある部分に書くことを求める、科目終了時に学習成果をレポートの形にして提出することを求める、というようだった。書くことは表現の手段と認識され、それ自体を学ぶ科目はない。

このことから、初年次生を対象とした担当科目では、大学生活における基盤となり、折に触れて立ち返り参照できる内容を提供することが望ましいと確認できた。

Ⅶ. まとめ

2021年度国際ファッション文化学科1年生向けの担当科目、前期「日本語文章作成演習ⅠAB①」、後期「日本語文章作成演習ⅡAB①」における実践を、初年次教育の観点から振り返り検討した。その結果、おおよそ適切な内容は提供できているが、目標設定や、前期「Ⅰ」から後期「Ⅱ」への移行に改善が必要なことが明らかとなった。

また、2年次以降文章作成能力そのものの育成を掲げた科目の設定がないことを踏まえて、指導内容を吟味し運営にあたるべきことが、科目担当者として確認できた。

Ⅷ. おわりに

以上、担当科目における実践をもとに、初年次教育としての文章作成能力育成について考察した。書いて表現する力の育成にはさまざまな要素が関わり、習得は容易ではないが、学生たちともども勉強を重ね、より効果的な指導ができるように研鑽を続けるつもりである。

今回は学期ごと、また1年を通じた科目の運営を包括的に考えた。今後は、ある特定の成果物に着目して分析するなど、より細かい視点からも研究を試みたい。

注

- 1) 全国の大学を対象とする調査「大学における教育内容等の改革状況について」の一部を成す。
- 2) 回答率は24.8%であった。
- 3) 12項目とは、読み手意識、目的意識、構成、主張、パラグラフ、根拠、分析、論文・書籍等の資料の活用、ネット記事・新聞等の資料の活用、参考文献リスト、引用、文法・文体、である。

- 4) 5段階とは、「十分に指導できている」「指導できている」「どちらともいえない」「あまり指導できていない」「まったく指導できていない」である。
- 5) 2021年度国際ファッション文化学科1年生は、A～Dの4クラスがあった。Cクラス、Dクラスも同様に、当該科目でCD①②③クラスが編成された。
- 6) ただし、1年次に落第した2年次以上の学生が再履修する場合がある。
- 7) A判定に相当した者の中から、特段に優れた成績を修めたと認められた場合、Sが付与されることがある。
- 8) 5段階とは、「よくできる」、「まあまあできる」、「なんとかできる」、「少しならでできる」、「まったくできない」、である。
- 9) 課題図書を白戸圭一(2021)『はじめてのニュース・リテラシー』と定め、この書籍の、著者略歴・はじめに・おわりに・第1章を対象とした。

参考文献

- 安藤葉子(2018)「大学で必要とされる『書く力』とは」『文化学園大学・文化学園大学紀要』第49集pp.133-143
- 串田代美(2020)「大学生のレポート作成技術を伸ばす授業シラバスと指導法的设计—ライティングの高大接続をめざした初年次新設科目「入門演習」の実践報告—」『実践女子大学文学部紀要』第62集pp.17-29
- 時任隼平、三井規裕、福山佑樹、西口啓太(2022)「初年次生のアカデミックライティングに関する実態調査」『関西学院大学高等教育研究』第12号pp.31-45
- 畠山理恵「文章作成能力育成のためのコースデザイン再考—履修生の自己評価を手がかりとして—」『文化学園大学・文化学園大学紀要』第53集pp.26-36
- 文化学園大学・文化学園大学短期大学部(2021)「2021年度履修要項」
- 文化学園大学(2023)「履修要項 2023年度」
- 文化学園大学 CampusPlan Web Service シラバス検索
https://cpwuweb.bunka-wu.ac.jp/Kyoin/web/Syllabus/WebSyllabusKensaku/UI/WSL_SyllabusKensaku.aspx
(2023.09.19.閲覧)
- 文部科学省高等教育局(2022)「令和2年度の大学における教育内容等の改革状況について(概要)」
https://www.mext.go.jp/content/20230117-mxt_daigakuc01-000025974_1r.pdf
(2023.10.23.閲覧)
- 吉岡路(2013)「学習者を主体とした高大接続教育の課題と展望」『立命館高等教育』第13号pp.43-60 立命館大学教育開発推進機構

資料1 レポートI 採点シート

結果別得点：よくできている＝3、ほぼできている＝2、少々できている＝1、できていない＝0

期限通りの提出		採点結果			
1	期限を守って提出できた。	よく できている			できていない
	内容	採点結果			
2	課題図書を読んでいなくても、この書評を読めば概要・主な内容がわかる。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
3	書評の筆者が、対象の本のどのような点をどう解釈・評価したかが伝わってくる。(単なる感想ではない。)	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
	構成	採点結果			
4	対象の本紹介・筆者独自の解釈や評価・本の基本情報の3者で構成されている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
5	対象の本紹介部分・筆者独自の解釈や評価の部分がバランスよく配置されている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
	書式	採点結果			
6	所定の書式を使って作成できている。	よく できている			できていない
	言葉	採点結果			
7	「大学の課題として書くまとまった文章」にふさわしい言葉を選んで使っている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
8	言葉を正確に使って書いている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
	段落分けによる内容の整理	採点結果			
9	1つの内容に1つの段落をあてて書けている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
10	段落の始まりを1文字分空けている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
	研究倫理の順守	採点結果			
11	引用している場合、どの言葉・どの内容がそれであるかを明確に示している。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
12	課題図書以外に独自に文献を探して引用している場合、「参考資料」または「参考文献」欄を文章のあとに設けて、書誌情報を正確に示している。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない

資料2 レポートII 採点シート

結果別得点：よくできている＝3、ほぼできている＝2、少々できている＝1、できていない＝0

期限通りの提出		採点結果			
1	期限を守って提出できた。	よく できている			できていない
	内容	採点結果			
2	何をテーマに、何をトピックに設定して書いているかがレポート全体から伝わってくる。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
3	全体的に「考える価値のある社会的な問題を取り上げる。十分な考察をした上で、それに対する答えを出す。」内容になっている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
4	第1章・序論を読むと、これから何について・何のために・どんなことを議論しようとしているかが伝わってくる。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
5	第1章・序論で問題提起をしている。このレポートの「問い」を明確に言葉で示している。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
6	第1章・序論または第2章・本論のはじめのほうで、トピックの背景・現状・キーワードの意味などについて説明があり、本格的な議論に入る前に、読者がその前提を理解できるように・話についていけるようにしている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
7	第2章・本論では、「問い」がいくつかの視点から検討・考察され、第2章の終わりのほうまたは次の第3章・結論で「答え」が出されるまでの過程が示されている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
8	第3章・結論で、「問い」に対する「答え」を明確に言葉で示している。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
9	第4章・おわりにを読むと、第1章から第3章までの内容が簡潔に「復習」できる。これまで何をやってきたかが整然とまとめられている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
10	単純な情報収集・正解さがして終わらないような、考える価値のある「問い」を立てている。問題提起をしている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
11	提起した問題と出した答えはかみあっている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
12	なぜ、提起した問題にその答えが出るか、理由が書かれている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
13	提起した問題・その答えと、理由になっていることは、かみあっている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
14	提起した問題・その答え・その理由を証明する根拠がある。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
15	提起した問題・その答え・その理由を証明するために出している根拠は、正当である。妥当である。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
	構成	採点結果			
16	「4章+参考文献」の構成、すなわち、「第1章序論・第2章本論・第3章結論・第4章おわりに・参考文献」になっている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない

17	各章には所定の見出しがついている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
18	第2章本論は、いくつかの節に分けられ、章にも節にも見出しと番号がつけられている。(例 2本論 2-1〇〇 2-2△△・・・)	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
19	第2章本論は節によって内容が整理され、最も内容が多いこの章を、読者が混乱なく読み進められるようにできている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
20	本文が、目次に出ている章や節の名前(見出し)・番号によって区切られ、整理されている。すなわち、①ひとつづきの文章ではない。②本文につけられた見出しと番号は、目次と完全に一致している。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
✕	書式	採点結果			
21	所定の書式を使って作成できている。または、所定の書式にならなって作成できている。(1枚目が表紙、2枚目が目次、3枚目から後ろが本文。ページ番号がついている。)	よく できている			できていない
✕	言葉の選び方、使い方	採点結果			
22	文章の分類では「公的・理論的な文章」に入る、レポートの文章にふさわしい文体「である体」または「だ体(ふつう体)」を選び、使っている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
23	選んだ文体をレポートの最初から最後まで使い、統一して書いている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
24	文章の分類では「公的・理論的な文章」に入る、レポートの文章にふさわしい硬さ・むずかしさのレベルを持った言葉を選んで使っている/使おうとしている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
25	言葉を正確に使って書いている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
✕	段落分けによる内容の整理	採点結果			
26	1つの内容に1つの段落をあてて書いている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
27	段落の始まりを1文字分空けている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
✕	研究倫理の順守	採点結果			
28	他者の発言・調査結果・研究結果を引用している文・文章では、どの言葉・どの内容がそれであるかを明確に示している。自作の文・文章と区別して書いている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
29	自分が言いたいこと・伝えたいことを補助するために、他者の発言・調査結果・研究結果を引用している。「ただ他者から借りたものを並べているだけで、筆者自身が何を考えて何を伝えたいかわからない」状態ではない。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
30	他者の発言・調査結果・研究結果を引用したら、本文と参考文献の両方に出所を書いている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
31	他者の発言・調査結果・研究結果を引用したら、本文では決められたいくつかの書誌情報を取り入れた引用文として正しく書いている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない
32	他者の発言・調査結果・研究結果を引用したら、参考文献には、すべての書誌情報がその資料の種類に合った順番にもれなく正しく書かれている。	よく できている	ほぼ できている	少々 できている	できていない